

平成30年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成 31年 3月 25日

報告者	学科名	看護学科	職名	助教	氏名	浅井美穂
研究課題	壮年期患者のクライシスに関する研究					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	浅井美穂	看護学科・助教		成人看護学	調査・分析・論文執筆
	分担者					
研究実績の概要	<p>諸言</p> <p>近年、ライフスタイルについての多様化・個人化が進み、それに伴い人々の生き方や家族の形態も多様化している。現代社会において、人々は何らかのストレスを抱えながら生活していることは間違いないが、特に病気に罹患するなどの予期せぬストレスは、ライフイベントの中でも大きな危機（クライシス）である。壮年期患者が疾病罹患により受けるストレスには個人の認知による差が大きく、その概要が明らかにされていない。また、治療による苦痛は身体的痛みだけでなく霊的な痛みを伴うため、看護者はこのような危機に直面している患者に対し、精神的安寧をもたらし、患者自身が自己を見つめ再統合する援助が出来る存在でなければならない。医学の急激な進歩によって、急性疾患における生命の危機的状況が回避される機会は増加したが、現代において疾患は慢性化し、慢性疾患を持つ患者は、病と共に生きることを強いられており、看護の世界においても、病と共に生きる方策を見出すための研究が以前より多く取り組まれるようになった。そこで、本研究ではまず「慢性疾患」「看護」というキーワードに着目し、先行研究の動向を捉える事とした。</p>					

※ 次ページに続く

研究実績
の概要

結果

「慢性疾患」「看護」に着目して先行研究の動向を概観すると、慢性の病を持つ患者の行動変容を促進する関わりの探求や、現存する心理療法的モデルや健康行動変化理論などに基づく患者アプローチについての研究、今までのような医療者側の一方的な患者教育ではなく患者の生活を尊重した協働的關係を作り出すことの必要性を提言している研究は、既に一定数の報告が見られていた。しかし、患者が慢性疾患を自分自身のものとして認識した際、いかなる経験をしているのか、そこで何を考え、いかなる問いを抱いているのかに着目し追及している研究ははまだ論文数が少ない現状であった。

また、「患者」「孤独」のキーワードで概観してみると、がん患者のクライシスや悲嘆のプロセス、障害受容までの心理過程に着目している研究は非常に多いが、今まさに孤独を経験している慢性疾患患者の孤独の「意味」に着目している研究がほぼ見られなかった。

考察

近年、ライフスタイルについての多様化・個人化が進み、それに伴い人々の生き方や家族の形態も多様化している。特に未婚化・非婚化は進行しており、2030年には、生涯独身者は、男性 27.6%、女性 18.8%となることが予測されている（平成 27 年版厚生労働白書）。社会的サポートから見落とされがちな年代である壮年単身者にとって、看護師は入院生活での身近な存在の 1 人であり、このような危機状況にある患者との関わりが、今後の日本社会でますます必要とされる援助になることが予測されている。そのため、今後彼らの独自のクライシスを明らかにすることは意義深く重要なことだと考え、研究の蓄積が求められる分野であると判断した。

今後の課題

本研究の成果は、臨床実践において慢性疾患患者の「病み」の本質を想像する力を鍛え、看護師の患者理解を促す。慢性疾患をもつ患者に起こっている病みの現象の本質を理解することで、より質の高い看護実践を提供することが出来る。もしくは、その病みの現象に対して、看護実践は何らかの影響を及ぼすことが出来るか否かを明確にすると考える。特に患者の経験は、彼らの内側から探求される必要があり、この当事者の経験から意味づけを行う過程は、「事象へと立ち帰ること」を提唱した現象学思想に学ぶことが多い。以上の理由により、今後は現象学的アプローチによる質的記述的方法を採用した研究の蓄積が求められる。